

日立市立中里小中学校（茨城県）

設計・監理／株式会社 三上建築事務所

施工／株木建設・多賀土木・茨城日鉦共同企業体



地域を灯す校舎の灯り 図1

山里の未来の弧を描く

整備の背景

地域の立地と歴史

日立市は茨城県東北部に位置し、日立鉦山を起源とする日立製作所発祥の地として知られる太平洋を望む街である。その日立市の中にあつて中里地区は、銅山のあつた高鈴山を越えた飛び地のような場所にある。日立銅山の公害問題を描いた新田次郎の小説『あるまちの高い煙突』の舞台となった入四間も地区内にある。かつては久慈郡中里村であったが、1955年昭和の大合併の際に日立市に編入された。それは日立銅山や日立製作所の労働者住宅があつたことに起因する。

今ではその鉦山もなくなり、中里地区は寂れた山里になった。それでも、明治41年に日立銅山に送電するために創られた中里発電所は茨城県最古の水力発電所であり、今も発電を続けている。

過疎化・少子化・教育課題の解決

中里小中学校は山間に建つ特殊な学校である。小学校と中学校が統合し、小学校1年生から中学校3年までが一緒に過ごすひとつの学校となった。それでも、1学年

10人程度に過ぎない。しかも中里地区の子どもたちだけではその数を満たすことはない。

ここにあつた小学校・中学校では以前から英語や言葉教育に力を入れ、地域との積極的な交流など少人数故に実現できる特徴的な教育が行われてきた。その教育を活かして、日立市全域から子どもを呼び込み、地域を支えることが企図された。実際、開校後数年を経過した現在では大多数の子どもたちが市街地からバスで通学している。

設計主旨

山間の川沿いの桜並木

久慈川の支柱である里川流域の中でも中里地区は東西の山が迫る場所である。敷地はその里川沿いの中里中学校が建っていた場所である。運動場の南側には西から東に大きな弧を描くように川が流れる。その流れに沿うように桜の古木が立ち並んでいた。そのロケーションを最大限に活かして、魅力的な小さな学校とすることを目指した。

弧を描く校舎一配置計画

統合校舎は既存の中学校校舎から最も離れた位置にある南側に、桜並木に沿って大きな弧を描くように配置することにした。校舎の構成そのものは横に長い中廊下型である。けれども、大きな円弧上に配置することによって校舎の見通しは限定される。各ゾーンに生まれる囲まれた感じを醸成しながら、教室同士の緩やかなつながりを創ろうとした。

そして、円弧外周に設けた全ての教室が春には桜に包まれる。さらに、その先には川が流れ、南側の山々も手の届くほどの距離にある。森の木々の彩り、草木のざわめき、川のせせらぎなど、四季の変化に豊かな自然を感じることができる。ひとつひとつの教室が少しずつ向きを変えて配列されることで、季節の移ろいに伴って変化する窓の景色は学齢とともに少しずつ変化する。

一方、円弧の内側は芝張りの運動場を囲みながら地域に開かれ、子どもたちを迎え入れるような様相を創り出している。

子どもを包み込む優しい学校が地域の中心一平面計画

この学校ができる以前から小学校と中学校は相互に連携し、幅広い年齢の子どもたち同士の交流とともに、地域の人たちとの密度の高い交流が図られてきた。また、英語・国語の学習を通して、人間関係の構築や自他を尊重する環境も整えられていた。そうした従来の慣習を発展的に継承できる環境形成を目指した。

そのことを前提に、学年毎の独立性を確保するために普通教室は2階に設け、小学校低学年・中学年・高学年・中学校と4つのまとまりを形成した。その上で、隣り合う学年が連携するように教室の間に多目的スペースを設

け、2学年毎に階段を設けて緩やかに学齢を区分するようにした。

1階には学校全体での異学年の交流を促すマルチスペースを設け、休み時間には全校の児童・生徒が寄り付き、地域とも交流が図れるように学校全員で集まれる場所とした。このマルチスペースを中心に、演奏コーナー・創作コーナー・実験コーナー・調理コーナーを配置した。それぞれの教室をマルチスペースに開放できる可変性を備えて、授業展開に応じて教室を拡張できるようにしている。

中里の自然を反映する木造校舎一構造計画

主たる構造は木造とした。小さな学校が里山の風景と調和することを意図したものである。そして、集成材ではなく、無垢材による在来構法木造を採用した。地域文化を継承しながら、子どもたちが木のぬくもりに包まれる中で生活・学習できる空間とするためである。けれども、単なるノスタルジーに陥ることなく新しい合理性を加味している。

木造の法令を満足させるために1,000㎡毎に2つの鉄筋コンクリート造の構造体を挿入し、5つの構造体で構成する。RC造部分を防火区画のための耐火構造とすると同時に耐震要素の役割を担うものとした。また、木造の小屋組みには梁や母屋等の横架材をなくし、集成材の垂木のみで構成している。その垂木は方杖で支持する丸太の中間桁によって掛け渡しを短縮し、断面寸法を小さくした。

この学校の存在が中里地区を存続させる地域の拠り所となることを願っている。

三上建築事務所 代表取締役 益子一彦

施設概要

名称：日立市立中里小中学校	施工：株木建設・多賀土木・茨城日鉦共同企業体	空調設備：個別空調式
所在地：茨城県日立市東河内町1953-1		衛生設備：給水：直圧直結方式
用途地域：都市計画区域外		給湯：エコキュート、電気温水器
建ぺい率：19.47%	主な外部仕上げ	排水：合併処理浄化槽
容積率：24.55%	屋根：ア0.4ガルバリウム鋼板縦ハゼ葺き	
敷地面積：15,030.17㎡	外壁：ア15マツ小巾板 杉本実 WP塗装	その他（特殊設備・外構等）
延べ床面積：2,839.70㎡	開口部：一般サッシ、アルミ建具	防災設備 屋内消火栓、消火器
構造形式／階数：W造一部RC造、S造／地上2階	主な内部仕上げ	
設計期間：2019年4月～2020年3月	天井：一般教室：グラスウールボード、岩綿吸音板	
工事期間：2020年10月～2022年3月	壁：一般教室：シナ合板＋石膏ボード	
設計・監理：株式会社三上建築事務所（建築）	床：一般教室：フローリング	
株式会社坂田涼太郎構造設計事務所（構造）	電気設備：受電方式：高圧受電方式	



特別教室を拡張することができる異学年交流・地域交流を図るマルチスペース^{※1}



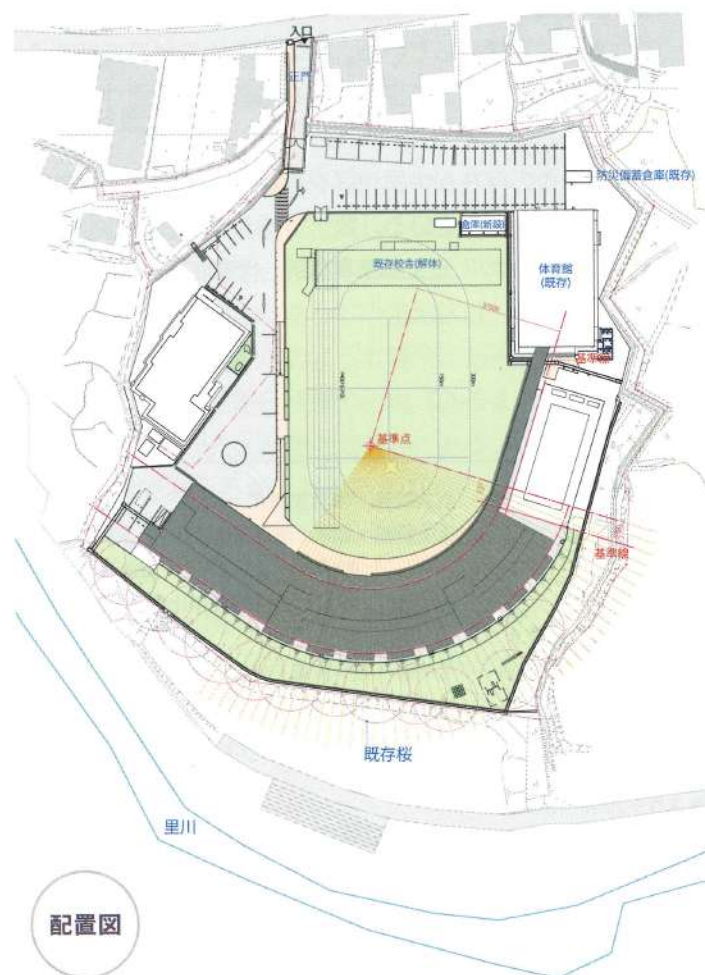
マルチスペースに面して配置した特別教室^{※1}



円弧を描きながら連結する教室と適度な距離感を保つ2階学年ゾーン^{※1}



外部の自然と対応する木質の内装の教室^{※1}



配置図



2F
平面図

1F
平面図

令和7年度優良学校施設表彰 受賞にあたって ／三上建築事務所

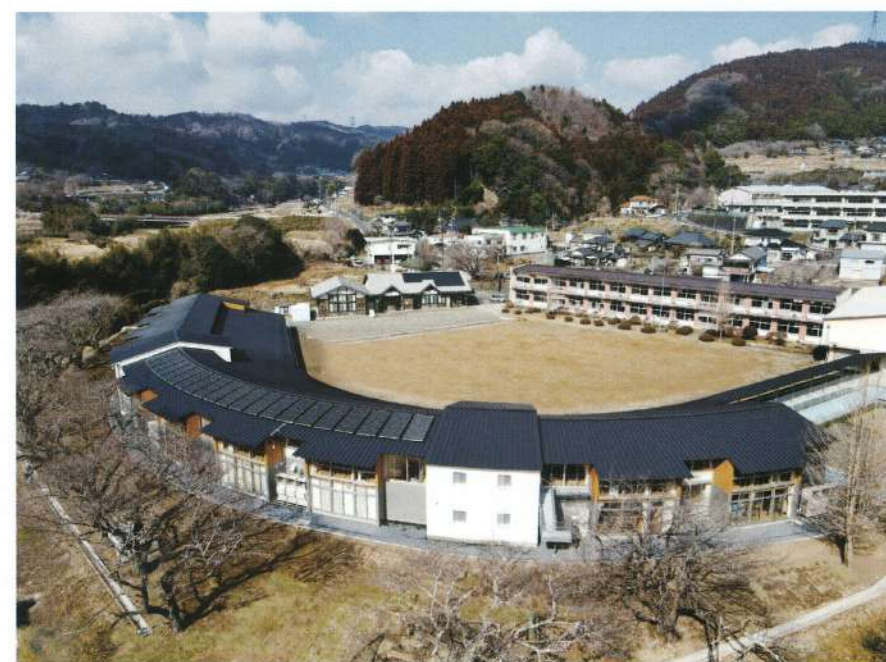
学校施設の設計に対して国内で最も権威ある優良学校施設表彰、部門賞「地域の特性を活かした施設」を受賞できたことをたいへん光栄に思っています。

国の健勝と世界の平和はその実現に向けた一人ひとりの思考と行動にあります。その基盤となるのは教育です。今回の受賞を励みとして、日本と世界の未来を担う子どもたちを育む教育環境の整備の一助となることに尽力していきたいと思います。

撮影：※1 堀内広治 ※2 三上建築事務所

講評

全校数十名の小規模な小中一貫校であり、過疎化が進む山間地域に活力を与えることを企図し、自然豊かな環境の中でのびのびと学べる環境づくりや英語教育に注力するなど、市内全域から児童・生徒が集まる。既存の体育館、プールを生かし、2階建ての木造校舎が校地に接し湾曲して流れる川と土手の桜並木に沿って円弧状に配置され、山を背景に伸びやかな環境と人を迎え入れる印象的な姿を実現している。1階は多目的ホールを囲んで特別教室がコーナー的に配置され、図書室を中心としてラーニング・コモンズを構成するなど、学びと交流を誘発する空間構成となっており、各所の階段で2階の教室ユニットとつながる。木造架構が小規模校ならではの一体感と変化のある落ち着いた空間を生み出している。地域の特性を活かした施設として評価できる。



桜並木に沿って弧を描き、山裾に広がる集落を囲い込む校舎（奥に見える校舎が既存校舎）^{※2}

協力会社

造作家具	イチムラ
図書室家具	日本ファイリング



子どもたちや地域を迎え入れる表情の校舎北側外観（運動場は天然芝）^{※1}